

野尻抱影・星和名の研究書簡

坂井義人 小島茂美 浅木宏
(長野県) (四国天文協会) (千葉県)

1 はじめに

「星空のロマンチスト」、「星の民俗学」、このキーワードから浮かび上がる人物像といえ、やはり、野尻抱影と言っても過言ではないであろう。戦前戦後を通じての「星の和名蒐集」という偉業に着手され、その見識と博識から、発見直後の第9番目惑星・プルートー（現在は準惑星）を、ギリシャ神話の由来から「冥王星」と名づけ、今に至るもその人気は衰えることはなく続いている。この報告は、過去の野尻星和名蒐集過程における市井の天文関係者（多くは天文アマチュア）との交流の足跡の一端から、その人間関係、また野尻氏逝去後も、殆どその全体像は埋もれたままの事実発掘を目的として、ここに言及するものである。

本文は2016年3月末に実施された国立天文台・第五回天文学史研究会にて報告した「野尻抱影・星の和名研究書簡」の内容に基づき、追記的な内容を含めて、坂井義人を筆頭に、困難なる「野尻抱影自筆書簡」判読（読み込み作業）を担当した小島茂美・浅木宏による三名連名の報告である。

2 野尻抱影自筆書簡について

さて、筆頭報告者・坂井義人の手元には、亡父の残した野尻抱影自筆の書簡類が残されている。これは、2012年・国立天文台集会時に報告した山本一清博士とその関連において岐阜金華山天文台を主宰した坂井義雄（誉志男）が、永年の活動の中から入手し、保管し続けた貴重な野尻書簡類32通のことである。これは後述する「香田寿男」宛ての昭和24年3月15日から、昭和29年8月24日までに至る31通の通信葉書と、原稿用紙的なB5版一枚にしたためられた星和名蒐集の証拠を物語る資料書簡集でもある。32通の野尻抱影より香田寿男への書簡については、野尻独特の判読困難な独自文字の解読作業とも言えるものであるが、2014年の一年弱を賭して小島・浅木両名の努力により、全文の内容を明らかにすることが可能となったものでもある。幸いなることに、共著者の小島茂美は天文アマチュアながら書道教育家、また浅木宏は野尻関係の事跡につき自身はファンと称しつつも、両者は深い知識と洞察力を糧として、筆頭著者（以下・坂井と表記）の及ばぬ諸点を補いつつ進められたものである。これらには、後に著作として纏められ世に問われた野尻著作に多くが紹介され、書簡には、その原点となる香田の星和名調査に対する野尻の感想的な内容と、また収集過程における指導的内容を読み取ることが可能となっており、その中には重要な認識をすべきものも含まれていて、ここに全ての原文内容を公表する事は意義深く、またその意味合いは極めて大きい。

以下、特に興味深く、また我国の星の和名由来と考えられる蒐集内容を示すと共に、可能な限りの解釈を試みつつ、野尻ー香田およびその他の当時の関係者の名誉にも言及を試みるものである。特に今回は、全ての書簡内容を紹介し、往年の星和名蒐集過程を示しつつ、果たしてその研究の意義と、一例として今後の展望、また敢えて民族学・文化人類学的な展開の可能性までも論じ、野尻星和名研究が、いかなる地位を確立すべきかまで考究論述を試みるものである。

3 野尻抱影略歴その他

野尻正英（のじり・まさふさ）、その号・抱影は1885年（明治7年）ー1977年（昭和52年）まで専門の英米文学者として母校の早稲田大学にて教鞭をとり、その間、特に天文趣味を生かした星の「日本名」（星の和名）収集に活躍した天文アマチュアでもあった。青年期はラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の講義を受け私淑、時にはその影響の下、心霊研究にも傾倒したという。その後の抱影は初期著作物からも伺えるように、特に仏教系の知

識と美術評論等にも秀で、その多義に亘る博識ぶりという足跡を残している。しかし、1930年に発見された新惑星プルートーを冥土・黄泉の国の王様という神話から幽王星を含む名を提案し、山本博士との相談からその名は冥王星となったと言う。当所、東の天文学系は一アマチュアへの命名は科学界には認め難く、暫くは元語のプルートーを使い続けたと言う。時代は準惑星の範疇に甘んじたとはいえ、しかし冥土の王様という名誉ある名は、その後の90年余の今も勿論その輝きは失ってはいない。

星の和名蒐集は同氏の40歳台初頭に開始されたといい、その後は、各地の天文アマチュアを従え、農山村漁村に伝承される本邦星の名を収集し続け、年々その著作集に集約され、今もそれらは広い人気を博している。晩年にいたる期間中まで、著述活動はもとより、各所での講演、とりわけその初期には、大阪(電気科学館)と東京(五島東急)のプラネタリウム科学館で「星の語り部」という世界にも進出し、現代の天文・星ブーム魁を演じたことは、言を待たない。ところで、面白い逸話を挙げておこう。野尻抱影は長兄であり、その末弟「大仏次郎」(おさらぎ・じろう)は官僚退官後、大衆文学の世界で活躍した。弟は「鞍馬天狗」「天皇の世紀」などの著作を世に問い、流行作家の地位を築いていた。それらは、近年設立された横浜市・大仏次郎記念館に集約されて、広く知られている。

さてそのような兄弟ではあったが、時折に尋ねられる「・・・野尻先生は大仏次郎さんのお兄さんですね・・・」と問われると、一瞬ご機嫌が悪くなり、その逆の「野尻先生の弟は、大仏次郎さんですね」というと、きわめて柔和な対応をされたという。勿論、兄弟が犬猿だったという訳ではないであろうが、弟の後背に準ぜられるのは、矜持が許さなかったのであろうと・・・思われる。大仏より長生きをし、後年は星の世界に列せられて、小惑星 1983A・No.3008 Nojiri として太陽系を巡っているご自身の姿に、先生は「してやったり」と思われているに違いない。また将来、日本の小惑星探査機の候補天体にでもなれば、その功績は永遠に称えられるであろう。

4 星和名とその収集過程について

星の和名の収集とは、畢竟、各地に散らばった記憶を集めて評価し、その背景を探って名前の発掘をもたらすという、言わば民俗学的な研究手法に準ずる分野といえよう。現代の大学教科課程のそうした調査方法では科学的手法と捉えられており、星和名調査にも、全く同様な過程で採取が行われた。ただし、野尻の場合は、ジャーナリストとしてもその手法はお手の物であり、特に1926年以降レギュラー的ラジオ番組出演時に、肉眼星の会なる任意的団体と呼びかけ、それに呼応した青雲の志よろしく、多くの若者などが自主的に協力したという。野尻は40歳より和名蒐集を志したということから見ても、今で言えばネットサイト構築とか、いわゆる交流サイトの先駆けでもあり、急速にその影響力と蒐集速度も広がりを見せたと思われる。ただし、あくまでもそれは推論のみで、今後それを裏付ける資料類の存在と検証をはかり、全体評価をなすべきものと指摘をしたい。

なお、その前提的な有用資料類の存在は以下の詳細評価と、その他の人士よりもたらされた貴重資料が横浜市の大仏次郎博物館に継承保存されており、今後、心ある方々のこの分野の展開と活躍を願う次第である。

ここでは、その唯一の事例として、戦後間もなくの岐阜県教職員・香田寿男なる人物を紹介し、興味深い事例と事実関係を柱に詳述をしたい。

5 香田寿男について

香田寿男(寿夫とも)という人物については、実はこの葉書書簡類の検証を開始してより人物特定と来歴について、いくつもの壁に突き当たった。報告者の手元に保管されている野尻自筆書簡類は、先ほど述べた如く、昭和20年代半ばから30年代前半まで続いた岐阜金華山天文台を主宰した坂井義雄の手元に継承され続けた。その存在のみは了知はしていたが、この際その全てを読みこなす事に意義を見出し、それへの挑戦を開始した。以上の経緯により、野尻書簡類は再び日の目を見ることとなった次第であるが、その葉書の送り主が野尻抱影、そして受け手が「香田寿男」「香田真弓」(または香田まゆみ)となっている

事が解るのみで、加えて判じ難い野尻の文字が要因となって、当初はその経緯が全く不明のままであった。正直なところ、報告者の坂井は野尻抱影の氏名は当然知るところではあったものの、大体において星の和名に対しては、素人以外の何者でもなく、そして先ずは古い B5 原稿用紙と思しき自筆書簡内容の解説を試みたのがその最初であった。ただし、全ての書簡類は襖カタログ帳に貼り付けられて、その事情を辿る事も困難であった。

加えて、その混乱の主要因としては、31 通の葉書には香田という姓は同じでも、個人名が「寿男」「真弓」「まゆみ」という宛先表記名であった。また、野尻葉書の宛先は、時折学校名が異なり、これは同じ姓の別人格が存在したのではという疑問に行き着いてしまった。どうみても「寿男」は男性、「真弓」「まゆみ」は女性を示すものと思われた。同時期に二人の香田という人物が存在し、多分ご夫婦二人ともに星和名蒐集家と、誤った推論を前提に、書簡解説を始めてしまったのである。しかし、それらの疑問を経過報告的に記し公表した拙稿作成後、一気にそれらの誤りの原因と、次の展望が新たにもたらされたのだった。

その経緯は、野尻葉書解説担当を小島とともに担当した浅木より、その鋭い指摘を受けたことに始まる。それは、既に正確なる野尻氏と香田氏の関係について先行的紹介の著作があり、野尻氏の弟子とも謳われた往年の天文学者・石田五郎氏の著作『聞書・星文化伝』1989 年 P.313 にその紹介が存在したのだった。

① 香田寿男についての疑問

野尻抱影氏の葉書には、先ずその宛名名として、「香田寿男」と「香田まゆみ」、場合によって「香田真弓」との複数の宛名が使い分けられていた。香田の姓は同じで「まゆみ」と「真弓」同一人物とは判断される。この名は、一般的には女性名と判断され、何やら「香田寿男」は夫であり、また「香田まゆみ」はご内儀で、共に葉書気付先がそれぞれ同じ勤務校の場合もあったり、また別々の学校の場合もあったりで、移動により夫婦別職場とか同じ学校であった等の夫婦教員とすら思えた。ここにその経緯を説明すべきなのであるが、上記にも紹介した如く、葉書のあて先などの表側は襖の製品カタログの色彩和紙に貼り付けられてしまっており、それらを無理に剥がすことは不可能なる状態も手伝って、事情はより複雑となり、それらは推論の域を出なかったという事でもある。即ち、「香田寿男」と「香田真弓」は、別人格と坂井は判断したのだった。実はこれが最も大きい判断の誤りであり、事実是一言で記すと以下の如くで、坂井自身も驚いた次第である。

@ 香田寿男 = 香田真弓 = 香田まゆみ

余りにも、この二つの名前は男性と女性の別人格と判断され、二人の香田という人物がまさか名前の使い分けとは到底気づく事は困難であった。しかし、これで先ずは、寿男は本名であり真弓(まゆみ)は、ペンネーム的な表記である事は確かとなった。ただ、この名の使い分けは、当初は野尻抱影も迷ったようで、女性の星の和名蒐集家であり、女性俳人と思ったようだと、石田氏の著作には紹介されている。当然そうだろう・・・、としか言いようは無いのであるが、まあとにかく一軒落着となったのだった。これは、知っていて当然のような気もするが、野尻氏の事は実は坂井はそれほどには深くは知らず、時折の野尻著作に出てくる「香田君」という人物表記程度の知識内容なのである。とにかくは恥じる次第である。共同作業の浅木の指摘に、目の鱗が落ちた想いを感じて、野尻ファンの力量を再認識せざるを得なかったと言うべきである。

なお、これは言い訳めいてはいるが、何ゆえ時に「香田寿男」と記載したり、また「香田真弓・まゆみ」を書簡宛名に使い分けたのか、今以って野尻の真意は計り知れない。とにかく野尻先生・・・これはイタヅラですかと、せいぜい言うくらいである・・・。今頃はお腹を抱えて笑っておられる事だろう・・・多分。

また、明確な記憶はないものの、坂井は香田先生には多分会っているのではとも思われる。昭和 29 年にして僅か三歳の記憶では無理ではあろうが、当時の金華山天文台での野外

で、好青年と一緒に写った写真が残っており、この人物が香田氏ではないのかと感ずる次第である。坂井義雄に聞いておくべきだったと悔やんでも、今さら如何ともし難い・嗚呼。

② 香田真弓という名前表記の面白さについて

上記をお分かり頂いたとして、では『真弓』と表記した理由についても紹介したい。女性名としては真弓と称することは確かに存在し、野尻も当初は女性俳人として認識されたのは、文学者の知識からすれば当然でもある。そして実際その如くで、このペンネーム的な名は、俳人としての称号とのことである。これも石田氏の著作に明確に記されており、香田寿男は、とにかく理科系生物教師と言いつつ、文系的な能力も舌を巻くほどで、後に野尻も何か分らぬ事があると、すぐに香田に手紙を書いて教えを乞うたと言う。江戸歌舞伎の台詞を全て諳んじていたくらいのプロ並みの勉強家であったとあり、趣味ではあろうが理系を生業としつつも、こうした能力は現代社会では稀有の存在と言えそうである。最近の理系人間は、なかなか心豊であるこうした話の中に、聞くべきものがあるのではとも思えるほどである。石田氏の紹介する香田の逸話には、今となっては聞くにも聞けぬ色々な逸話であり、じっくり読んでみる事も大変に興味の湧く小噺となっている。

さて後回しになったが、真弓の命名経緯を石田氏に従って紹介したい。香田寿男は、かなりの高い能力を持った俳人・雑俳家と紹介されている。そして、高名なる俳人の高浜虚子に心酔し、それに準じて『虚矢』（きよし）と称したのだと言う。香田虚矢という事であろう。ただこの俳名は余りにも恐れ多いと憚ったらしく、改めて言葉のお遊びよろしく『虚』の反対語（対語）として『真』、また『矢』の反対語とし『弓』と改名したのだと言う。香田真弓の誕生である。これで「まゆみ」の由来も得心できた。なるほど、歌舞伎台詞の大家であると言う意味が良く分る気がした。かかる経緯で、その後は香田寿男を本名として、真弓または平仮名の「まゆみ」を使い分けたのであろう。この香田の意思を重んじて、時には「寿男」「真弓」「まゆみ」を野尻氏も使い分けたのであろう。そして野尻書簡等にその使い分けはまだしも、野尻氏著作にもこの名を使い分けて、「香田寿男」（岐阜）と使ったり、「香田まゆみ」としたりで、その差異に躊躇する事も多く、やはり岐阜には二人の香田がいるのではと読者も迷われたのではなかろうかと思われる。ただし、同じ著作内でのその使い分けは無く、比較的に「香田寿男君」と蒐集者の氏名の紹介備考をつけており、いずれにせよ、香田寿男氏は野尻氏の片腕の如き存在であったようである。野尻著作には、他にも全国的に蒐集家の紹介も多くあり、それらは言わば天体観測でのデータ取得を務める天文台の観測係りのような存在と言えれば良く理解されるであろう。以下に、浅木指摘の著名なる石田五郎著作の一部転載を示したい。明確に香田氏の来歴の理解が可能である。石田五郎著 聞書「星の文化伝」・1989年 P.313~P.314 に記載。

香田寿男は美濃谷汲寺(谷汲村?) 近くに住む中学の生物教師。雑俳家ではじめ「虚矢・・きよし」と号したが虚子の名をはばかって、この対語の「真弓」を用いた。戦後、外地より復員、オリオン座(獅子座の誤り?)の和名「樋かけ星」・・トイカケホシ・・を報じて抱影の弟子となった。抱影ははじめ「香田まゆみ」を女流俳人だと思っていた。

なお、別途に野尻氏ご実弟を顕彰した「大仏次郎記念館」(横浜市)には、遺愛屈折望遠鏡ロングトムをはじめ、数多くの野尻著書も収蔵されている。全国からの星和名報告の書簡類その他も受け継がれていることを、坂井は本年3月26日に確認した。発掘対象としては貴重で、心ある方の後進研究を望む次第である。また、別資料としては、山本一清博士と野尻氏との書簡のやり取りも相当にあった模様で、京都大学の山本一清博士資料保管室には保存されている。今後の両氏の関係解明にも、挑戦される意欲ある方の出現を期する所である。

6 野尻抱影自筆書簡の紹介

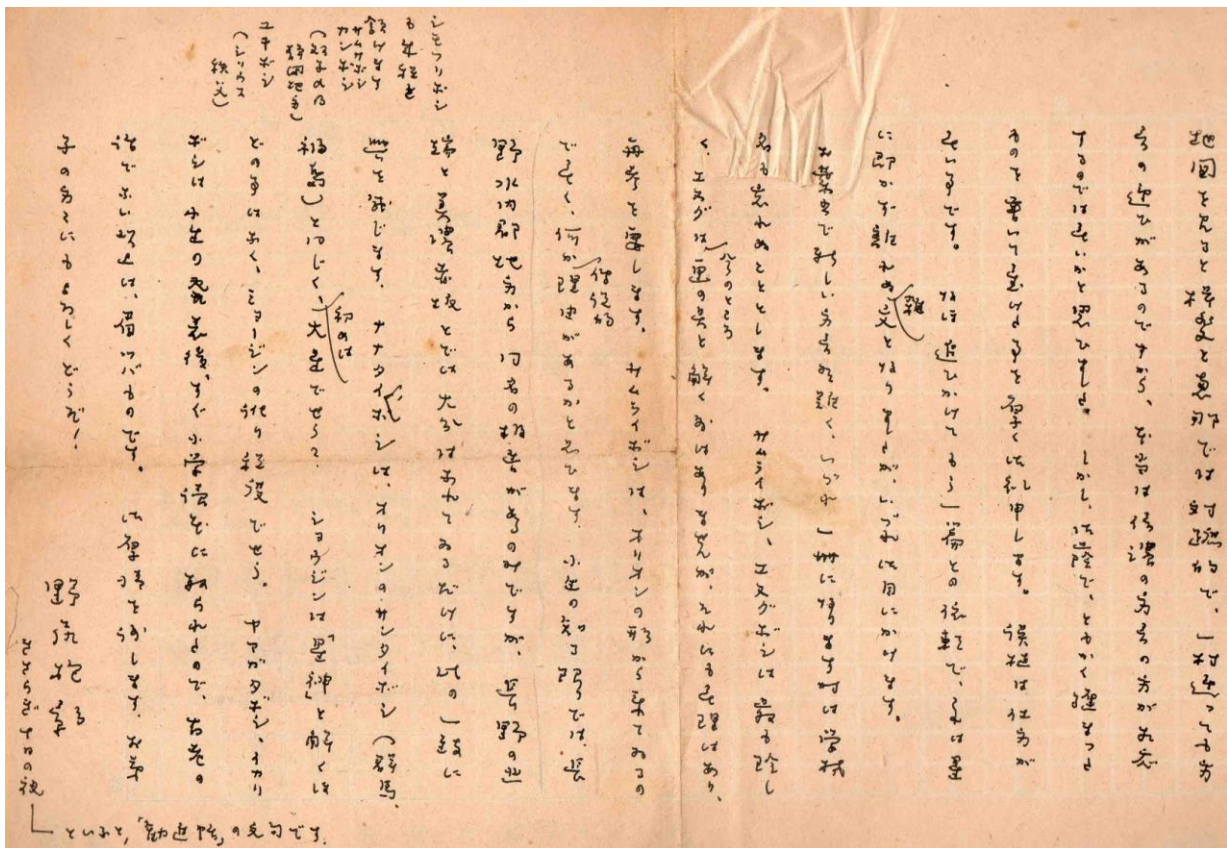


写真1 A4版半紙に記された野尻抱影自筆書簡 記載日時等不明及び香田宛と推測

「記述内容」

地図を見ると揖斐と恵那では対蹠的で、一村違っても方言の違いがあるのですから、本当は信濃の方言が対応するのではないかと思ひました。しかし、お陰でともかく纏まったものを書ひて戴ける事を厚く御礼申します。誤植は仕方が無いことです。

なほ追ひかけてもう一篇との依頼で、これは星に即かず離れぬ雑文となりましたが、いずれお目にかけます。お葉書で新しい方言有難く、いづれ一冊になります時は、学校名も忘れぬこととします。サムライホボシ、エヌグボシは最も珍しく、エヌグは今のところ画の具と解く事はありませんが、それにも無理はあり、再考を要します。サムライボシは、オリオンの形から来てゐるのではなく、何か使役的理由があると思ひます。小生の知る限りでは、長野水内郡地方から同名の報告があるのみですが、長野の西端と美濃赤坂とでは、大分離れているだけに、この一致に興を感じます。ナナタイ・ボシはオリオンのサントイボシ(群馬・福島)と同じく、始めは大星でせう？ ショウジン「星神」と解くほどの事はなく、ミョージンの訛り程度でせう。ヤマガタボシ、イカリボシは小生の発表後、すぐ小学読本に知られたので、古老の話ではない以上は眉ツバものです。ご厚情を謝します。お弟子の方々にもよろしくどうぞ！

野尻抱影

きさらぎ十日の夜・・・という、「勸進帳」の文句です。

上記の半紙一枚についての内容の判読は、坂井にて実施を試みた。何とか読み込みも出来て、多分誤りは無いであろう。しかし、この作業の辛さを心底かみ締めた。とにかく一気には読めないのである。行きつ戻りつ、一文字一行に推論を重ねながら実施をした。

なお、あて先等の封筒は失われており、その日時とあて先名も不明。ただし香田あてであることは間違いなく、また、小学校での教材にも使われた事なども記されている。

① トイカケボシについての野尻自筆葉書事例

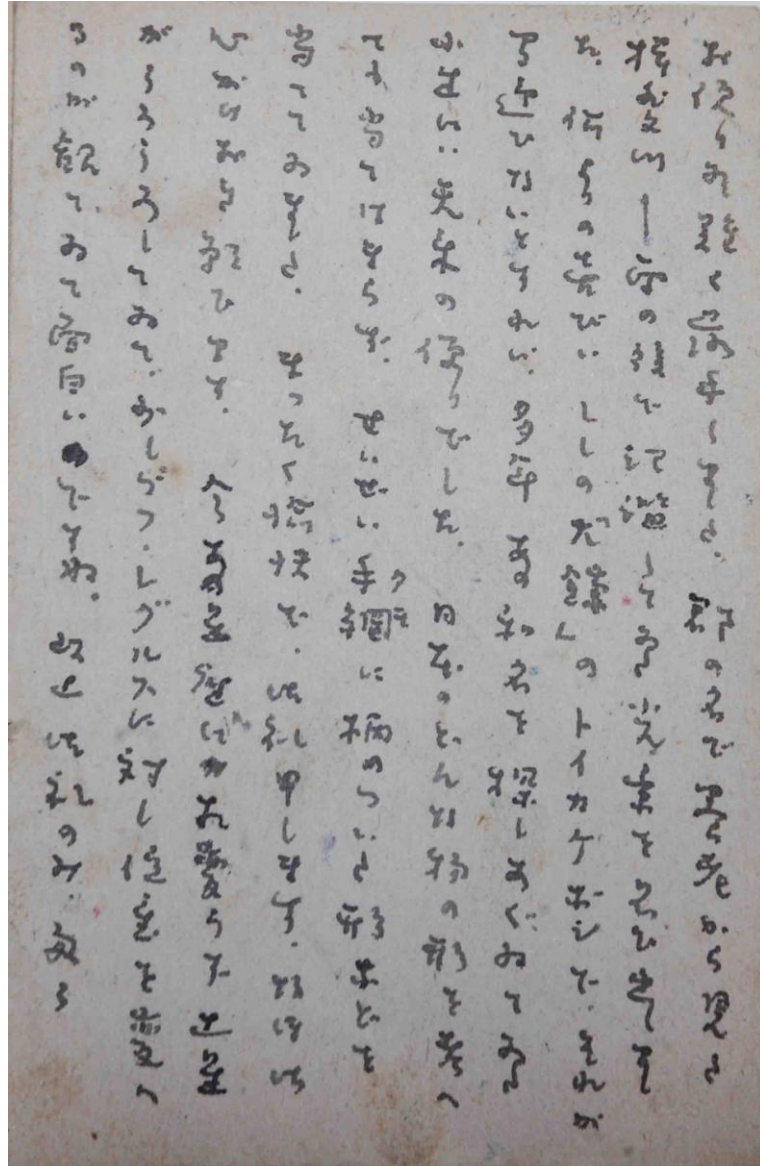


写真2 トイカケボシ採取について野尻氏自筆葉書

★ 昭和24年3月15日・横蔵村 香田まゆみ・トイカケボシ

お便り有難く落手しました。郡の名で養老から見た揖斐川一雨の後で氾濫している光景を思ひだしました。何よりの喜びは、ししの「大鎌」のトイカケボシで、それが間違ひないとすれば、多年のあの和名を探しあぐねていた小生に、天来の便りでした。日本のどんな形を考へても当てはまらず、せいぜい手網タモに柄のついた形などを当ててみました。全く愉快で御礼申します。〇〇御心がけおき願ひます。今あの星座に相変わらず土星がうろうろしてゐて、少しづつレグレスに対し、位置を変へるのが、観てゐて面白いでね。

以上御礼のみ

毎々

注釈

この葉書が、トイカケボシは「獅子の大鎌」を証明したと言われる香田宛の野尻葉書の証左である。石田五郎氏の解説にある記載で、香田はこの報告で野尻弟子となったと言う。以下にその他の葉書内容の紹介し、その前後の時系列的な理解も含めてお読みいただくと、大変に意義深いであろう。

トイカケボシは、以下の写真にも示す如く、特に獅子の「大鎌」に着眼した和名であるが、それでも中々に事情は複雑で、その解釈にはより検証が必要であることが示唆される。

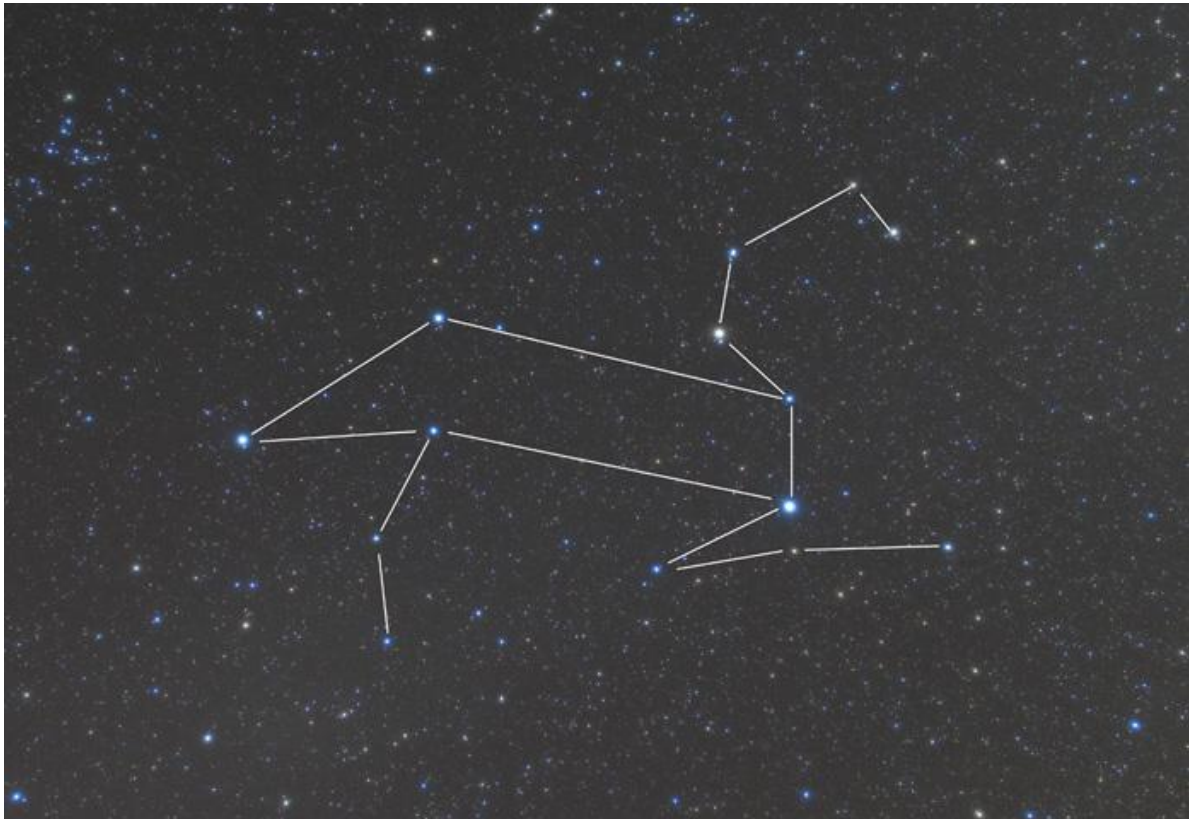


写真 3 獅子座の全体像 右寄の輝星は一等星レグルス(獅子の大鎌とも称される)



写真 4 屋根の雨樋と金具

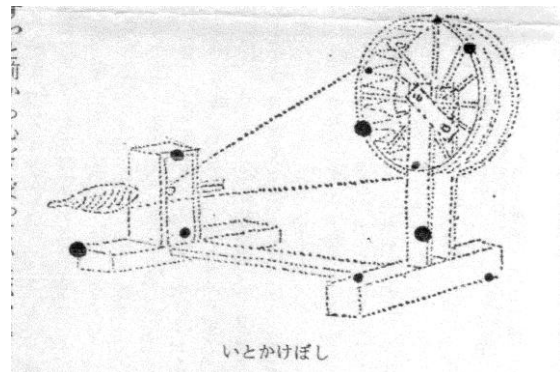


写真 5 いとかけ星 (糸車と言うべきか)

写真 3 は、ご存知「獅子座」のその姿写真である。この獅子は、ギリシャ神話の人食いライオンで、勇者ヘラクレスの冒険で退治されたという気の毒な動物でもある。しかし、その姿は全く誰が見ても獐猛な動物に見立てることが納得は出来るが、日本人はそうには見なかったらしい。実際、野尻星和名調査採集にも、中々に網にかかってこなかった模様で、岐阜県西部の「トイカケボシ」に対しては、「永年探しあぐねていた・・・天来の便り」と、報告者の香田寿男には最大の賛辞を寄せている。全国には、その採取協力者が多く存在したにも関わらず、こんな目に映じやすい春の夜空の星の並びに対しては、今でも探求すべき問題が残ったままという気すらする。トイカケボシというのは、獅子の大鎌の部分のみを切り出した名前で、まさしく写真 4 の雨どいを支える金属部品に見立てることは可能のように思えるが、しかし、仮に江戸時代前後より後の時代に継承された名前が和名というならば、藁葺きや茅葺の屋根には、こんな道具は必要も無く、その意味で疑問が生ずる。また、香田の報告の後、別途に獅子座全体を天の橋立地方では「糸賭け星」（いとかけ星）と天界誌に報告した椋平廣吉(地震前には虹が出現と主張)という人物も存在し、これはこれで説得力ある結果とも考えられる。今回の研究会での指摘には、これは「糸車」と呼ぶべきであろうという意見もあり、これも大変に面白い。実際、野尻もこの椋平採取のこの名前には、相当に動揺もあったようで、この名の方が適切だろうとも吐露している。

ここでは、もう一つの可能性も示しておきたい。確かに「いとかけ星」とか「糸車・星」などは、事実「トイカケボシ」より、民俗学的な立場からすると、より説得力は高いとも思われる。明治以前ももとより、絹そして麻とか綿での織物業は盛んに行われ、全国各地には今も多くの技能が伝承されている。ましてや農家の副業の一端としては、「糸掛け器」「糸車」などは日ごろ目にしていた筈である。かなり極論ではあるが、元来はこの星の並びは、やはり織物の道具と見立てて、そして各地に伝承を繰り返して、明治期の雨どい付の家屋も多くなり、結果、「いと」という名詞が「とい」と口伝が単純に変転した結果、両方ともに残されたというのは、おろかな推論であろうか。(図版転載: 日本星名辞典、ネットサイト)

7 野尻書簡その他 31 通の判読内容 (担当 小島茂美 浅木宏)

以下は故・坂井義雄所有の野尻直筆葉書判読済み 30 通、および未判読一通の例示である。文中の〇〇は解読不明文字、()は判読困難文字そして【 】は野尻自筆の注意喚起括弧を意味する。内容は重要と思しきものから、また日々の暮らしから美術関係等にも及び、野尻の見識の深さと広い分野に及ぶ博識を伺わせ、60 年もの過去に遡る面白さを、ぜひ味わっていただきたい。なお、最後に掲げる葉書一通のみは投函日時も不明瞭で、小島・浅木両名の判読作業の手元にも提供されなかった事もあり、この際その文字解読という作業の苦汁と愉快さの一端を体現いただければ幸いである。

★ 昭和 24 年 9 月 19 日

お便り有難く拝受しました。特に御地の星の和名をお集め下さった事は百人の読者にまさる喜びです。トイカケボシの発見は、年来の望みのかなったもの。フォーマルハウトのアカボシ、アマノガワボシ【いい名です】

ふたご α β のキンボシ、ギンボシ【やや出来すぎてゐる感】も、喜ばしい収穫でした。ミツボシの(マ) (ン) (ガ) ボシは、相当広くいはれてゐます。岐阜の星名も控へてありますが、これだけの採集は初めてで、一度に貯蓄がふえました。先頃キヌボシ【金星も絹ですが、十か九つに見える】の俚謡(?) で、岐阜市の(か)(た)(か)(ら) 和星を〇〇〇〇、これは中国地方でいふのとおなじでした。 御礼まで 早々

★ 昭和 25 年 3 月 1 日

お便り有難う。サンカク・シカク・ゴカクはそれぞれ別の名となつてゐますが、(北)(斗)をさういう風に見て、名づけてゐるとすれば珍しい採集です。ゲンジとヘイケは山本博士が名をつけたのが最初と信じますが、果たして昔からあったら見つけものです。村の古老がまったくそう(言)つてゐるでせうか。発表のために確実な(調)査を待ちます。獅子のトイカケボシのやうな優秀な名が現われて来るといいと思います。

晴夜は火星がたうとうスピカの上に到着、珍しい観物でした。もう少し下だったら、尚面白かったでせう。

★ 昭和 25 年 12 月 11 日

能では「天鼓」が牽牛星を【一名「河鼓」】を鼓の形を見、それから天降りると見たもので、元清の創作かと思ひます。中国の伝説には、まだ見出してゐません。七夕関係では珍しい作です。

龍神の灯し〇〇をカープスと見ることは、或る学者が実験して発表しました。〇〇のものです。多くの中にさういう場合があったかも知れません。どこでもそうと推断するのは、一ど調べてみたものでなければ早計でせう。

尤も〇〇〇一つであるかも知れませんが考へるように。又(印)(度)や支那の伝承も調べる必要もありませう。いちばんカノープスが適切ではあります。十和田湖に現れるものを獅子 α と いった人があります。

★ 昭和 26 年 1 月 17 日

御年賀有難く御礼申します。まだ独立した国ではないので、今年も賀状控へました。もう一つの御礼は一枚のお葉書の番号が入選で切手が当たったといふ話です。これではせつせとご返事を、しなければ成らないわけです。

先頃、恵那○村の新(聞)(部)から依頼されたので、「美濃伝承の星」を寄せました。○として「揖斐郡の K 氏」からの(教)へによる事を断りました。同紙、月末にはお送りできる事と思ひます。今年は本にまとめたく、その節は貴名をお借りします。

雪嶺出て早や(拝)まるるロクジゾウ 影

こんな句を挿みましたが、恵那岳がその方向かどうかは知りません。こちらも二三日前(分)(も)雪、今は早春の陽うららです。

★ 昭和 26 年 2 月 26 日

東京もやうやう早春の陽ざしで、庭の老梅も(満)(開)鶯が(毎)朝来ます。バンボクと人の句もなかなか味がありますね。星詠では雪舟(唄)。「一や」は此頃あまり見かけないし、僕もなるべく使はない事にしてみます。考へるほど使ふのがむづかしいからです。星もけっこうだけれど、御地の方言は努力して集める理由はりっぱにありますね。

柳田(橋田?)さんの雑誌に発表するつもりで、やってみてはどうですか。西美濃の方言を○と採集した人がいますか。伝説と併せてやってみては如何。

★ 昭和 26 年 3 月 29 日

三十三間堂の画はがき、昔からこれを見るたびに、この一角にある柳の大木が生命に○って○○を感じます。これが星となったらこの大(字)は箔の落ちた仁王の裸像になっているでせう。しかし○○も久しくいかず、「○○」といふ雑誌の寄稿するのに苦心しました。

この頃、旭川のアイヌの星の伝説で、すばらしいものを四、五入手。その中整理して発表するつもりです。

トイカケボシの下の土星も少しづつ見頃になって来ました。昨夜今頃、義宮さんに星の話をして上げた時、スピカが大好きだと言はれたのを特に珍しく聞きました。

アメリカへ六地藏が送られた由、地藏の六体は昔から定まってゐることで、スバルを○して(数)から言ったのか、この連想で言ったか、面白い問題となりませう。

★ 昭和 26 年 5 月 3 日

ご栄転の由、さっそく星名の御検索御有難い事です。クジョウノホシは【名は初耳ですが】岐阜から報告を受けた事があります。サンジョウは群馬、埼玉だけだと思っていましたが、イツボシはやはり馭者座でせうか。季節、方向、御調べ願います。此頃旭川付近のアイヌの星名と伝説を四、五報告され、未発見のもので科学読売【七月号】に書く事にしました。まるで内地のものと(違)って、むしろ南洋やアメリカインディアンに連(絡)があります。わし座の β - α - γ α が老婆、 β はなまけ息子、 γ は働き息子で船に乗っている形。なまけてゐる方が光がうすいといひ、これに面白い伝説を伴ってゐます。

こちら今若葉が美しく、庭に鯉のぼりがひるがへってゐます。上野のマチス展だけは東京に住む者にせめての喜びでした。

★ 昭和 26 年 7 月 10 日

今年の七夕竹は相当でかいのを立て、吊灯籠にも灯を入れるやうにしました。庭のま正面が(き)(れ)(る)。しかし手ぐすね引いてゐた八日の金星のかくれんぼは雨で落胆。先日此の辺の理科(教)(員)70 名ほどに、粉の掩蔽の(講)(義)もして○いたのだが失望したでせう。先生たちは、(星)の(教)へ(方)には弱ってゐるらしく、やはり自分の興味を掘り下げる熱意がかけてゐるからです。この月の向きなども今更話を聞いて○いてゐるのが多○で、昨年度までの「小学生の科学」のひどい誤りをも(参)(考)に挙げてやりました。今日は快晴でまっ

たく翠空、一と雨やられた七夕竹が赤ちかけ、短冊(紙)や 釣りあみの金銀も〇〇で、ダリヤ畑の上で揺れてゐる。川へ(流)すといふ事も、一つにはこんなところが来てゐるやうです。水中花を星にたとへるのは、面白いと感じました。一度もやった事がありません。

★ 昭和 26 年 9 月 26 日

「はんかい星」があつた由で嬉しい御便りです。秩父から(報)(ぜ)られたとき、この人は少し星名を製造する傾向があるので、気になってゐましたが安心しました。「星座神話」読んでくださって有難く思ひます。あの写真蒐集には、ずいぶん苦心しました。「ヘラクレス」の迫力とポーズは中にも出色です。挿入の詩句では、〇〇〇を最も好んでゐます。最後の(吉)田君の詩は今でも暗誦している人たちが、あちこちにゐます。

颱風〇〇〇らしいが、うそ寒い曇り日と雨つづきで仕事も怠り勝ちです。

老い果てのご奉公だと植木師は紺はんでんに茂み(見)(て)たつ。

まき、檜、椎の茂みにかくれては鉄鳴らせり老植木師は。

★ 昭和 26 年 10 月 19 日

ススキボシ説明はちょっとつかないけれど、何か分かるような気がします。ほかには〇の〇〇に相当する星はありません。【まだ発表しなかったと思ひますが】。さそり座のヤナギボシもいい名です。ホキボシサンも十分頷けます。

こちらも秋晴がつづき陶然としてゐます。(満)月が川に映えて、下流に遠花火はいい句になりますね。昔

雨雲に 鶺鴒映り下り来る (長良川)

といふ写生句を鶺鴒で誦んたのを思ひ出しました。「萩に鳴る恵祝の雨」はいい句だと思ひます。時候がいいので方々から、呼び出しが来てゐるが、仕事に追はれてヒニクの嘆きを繰り返してゐます。

ロクジゾウーは、地藏は六体並べることになってゐるので、或ひはスバルの(様)に関係がないかも知れません。いつかに調べてください。

★ 昭和 26 年 11 月 28 日

新聞有難く、こと座の「うりきり俎板」— 他に「うり畑」あり— ケフェウス、へびつかいの名も初めてでひどく満足しました。生きた御厚志がなければ知らずじまひになるところでした。あればあるものですね。へびつかいとケフェウスを、ノミの形と見る目もよく利いてゐます。「星まんだら」読んで下さって嬉しく思ひます。のんきな(話)ばかりを(楽)しめるのですが、あの出版社—ひじょうに大かった— が(連)(催)に(い)(ぶ)れて、印税(全)(然)よこさなかったもの。残部を売り払ったのでせう。東京に曝されてゐないのがまだしもです。小生としては楽しい本なので放〇を聞いてゐるつもりで御愛読下さい。「(濱)星(屈)」は古いものですが、(評)(判)がよかったのです。創元文庫から「新星座巡礼」【昔のに手を入れるもの】「星の伝説」【これまでの本から三十種ほど抜くもの】が出ます。来年でせう。

御礼まで句々致し— 小春日和の南縁にて

★ 昭和 27 年 8 月 8 日

やはり御説のやうにナキボシ【スバル】に対するヒヤデスでせう。センスボシ他地方にありましたから。「巡礼」は(随)(想)だけが書き下しで、自分でもやや(得)(意)です。しかし、一日も早く方言集成を出さなければなりません。「伝説」の写真はやや老けてゐる相だが、写真としては好評。誤植ちょいちょいあり、中で P92 中央の「なほアイヌの古話」は「北欧の古話」のあやまりだ。この三行は「略」と御記入下さい。「巡礼」にも出しあり。星座の原名にも二つ。

颱風の方向が反れて今朝は初秋のやう。能登からシリウスをアオボシ又はカゼボシ、オリオン α β をミツボシのアイテボシといふと入手。特に前者は星が生きてゐるので愉快です。映画館の冷房装置はいいが、炎天の往来へ出ると反ってたまらず、行かないやうにしています。(養)(老)の菊水にでも泊まりたい。

★ 昭和 27 年 12 月 21 日

押し詰って東京はバカ騒ぎをしているやうですが、クリスマスの猿真似など不愉快で、いっさい炬燵で読書に暮してゐます。このところ(放)(送)が大分続きました。「天文岐阜」はまだ入手してゐませんが、ぜひ拝読したいものです。天体と宇宙はひどく(世)(話)をやかされました。あんなバカ親切な本は無く、その代り再版になっても赤字で、とくに品切れにな

ってゐるのにまだ出ません。御役に立って光栄ですが処々ミスがあり、どうして(眼)を逸したか不思議です。P135 大阪名城の写真は○造、P223 の下の写真の説明文字誤まり、P220 【(十)(三)(の)】の「十六年」は「百六十年」、終りの行「五百年」は「十万年」、P49 十二行目 一、七六秒は「十七、六秒」などの他に、お気づきがあったら御報ください。P204 図版も 8.6 光年は 8.7。本というものはむづかしいもので、どんな大家もミスをやっています。況んや読者は信じてしまふのだからサイナンです。

「新星座めぐり」今本版が漸く出来ました。誓子氏の(真)(蹟)は好評でせう。

★ 昭和 28 年 2 月 1 日

えい、やっと春。興福寺の鬼は志賀さん曰く、ユルフンの鬼。「星の神話伝説」の新版に日本の星の伝説を三十ほど加へるので、やっと書き上げ、星名について「香田まゆみ氏」があちこちに(顔)を出します。(数)(日)前に(来)た青年が、谷汲から一里ほど奥の山寺へ国宝公弘仁仏(?)を見に行つた話をしてゐました。谷汲の画はがきがあつたら通信で拝見し渡し。紀三井寺もそうだが、谷汲も春光を想はす寺です。(此)(機)にそろそろ星名集成を書き出さうと思つてゐます。

★ 昭和 28 年 3 月 10 日

稀な御○○に、こんな郊外まで来られるのはとも思ひますが、しかし東京は京都みたいに見るところは無し、【夜の銀座は美しい】星の○○も結構です。喜んでお待ちします。何人御同伴も歓迎。十二日いい。中津川の学生が来る約束で○○○○岐阜ユースセイ也。(玉電「渋谷」から二十分弱、下りて五分か)(自筆案内図つき)

★ 昭和 28 年 3 月 14 日

お○り退めとのことで落胆しました。庭に揖斐川の水石を据え、(話)をこれから始めようと思つたり、上げる本もと、三(揃)へておいたのです。殊に明日は中津川出身の大学生が来て、初対面であの辺の話をいろいろ(聞)き、貴君のおいでになる話もして、岐阜○○と喜んでゐたところでした。しかし又(機)(会)もあるでせう。木曾を下りて、中津一大井一虎溪山ー谷汲と、巡歴する夢を描いていても見ました。谷汲の写真、なるほど名利と思ひました。近くに、溪○でもあるかと思ひます。同時に大井町のお嬢さんから星の便りあり。卓上に恵那の「茅あられ」と「栗の雫」があつて、これでも貴君を(驚)かすつもりでした。

★ 昭和 28 年 3 月 20 日

お手紙ありがとう。○(青)(年)なのに感心しました。本名は何かで読んで知つてゐます。(俳)(号)と共に三足の草鞋という次第。今ブリヂストン、ギャラリーにゐます。近代、現代の名品がワット(殺)○してきて、嘆息ばかりです。御上京の折はこの一つを見るだけで、その甲斐があるでせう。このセザンヌの静物の(沈)(静)と色は前から好きなものですが、写真では仕方なし。

三月十九日 (野)(村)

★ 昭和 28 年 3 月 20 日

今朝改めて御便り嬉しく拝見。なるほど話に出たのは(深)(沙)大王でした。(添)(へ)書きで珍しいものと感嘆しました。○○でも初(期)のものでせう。○○は○っと(雅)(号)だが字の○○り落ちつかず、(誰)しもよくないと感じました。誰しも「清き薔薇」かと解するでせう。貴句も一体に○つてをり俗人には解らない。星も特別の名では季節も○かず、イメージにも浮かばない。発表には選択の必要があるでせう。仏教趣味も俗事に遠い。また土

地の国有名も多いやうで、古地名に伴ふ(清)(調)を利用するのは、〇〇村を(謳)(歌)したホトトギス初期で沢山のやうです。「(農)夫(死)(す)」は天狼糸が(突)発したせっかくの上五七をも死なせる感、狗賓星は星を知らない人にも実感があり、いい句。その他すなほな句。

★ 昭和 28 年 5 月 11 日

今日のみ春を歩いてしまひけり 〇村
一年の最高(位)ですね。ここでさへ眼を細めて若葉の輝きを見ている。〇して谷汲あたりの(春)〇はどんなかと思ふ。養老も(瀧)にさしかけて、楓か何かあったやうです。それがしぶきに濡れて光っていると想ふと、それだけで遊(意)が動きます。
「ぬかさめ」といふ(言)葉は(無)い筈です。楸邨氏の星の句で一(番)(頼)まれてゐるのですが、どうしても〇はない。やはり誓子君でせうね。
星では、美しい句箋が十何枚もたまって、俳人たちを羨観してゐます。「新星座めぐり」(巻)〇の句箋は紺のケイで、朱印とも三色で出したかったが実現出来ませんでした。

★ 昭和 28 年 9 月 12 日

御便り有難く、こちらも七夕は雨。今もって梅雨明けの雷が鳴らず、はっきりしまん。(祝)い七夕竹の燈籠に灯を入れてゐます。ラヂオ飛んだ饒舌です。「(案)(外)お若いお声」の「(案)(外)」は(少)し不明ですね。「イカルはイカルがの〇〇」と関係があるか無いか、よく問題になるが、僕はどんな(鳩)かはっきり知りません。
〇〇の句はいいと思ひますと、花作、蝶、梵天も(清)(新)です。今、卓の上で山椒の葉にアゲハの幼蟲を飼つてゐます。こいつの擬〇(眼)の間をつなぐΩの模様の列を、レンズで見て、驚嘆してゐます。自然は実にふしぎなもので〇(星)のみならん(作)です。

★ 昭和 28 年 12 月 24 日

押し詰まりましたが、あなた任せでどうでもいい年の暮れです。お便りありがたく、すると揖斐川の河口は真南に向いてゐ事になるわけでしょうか。それが少し判りません。先月「朝日」の学芸欄に「スバル」を書き、「雪嶺出てー」の駄句を入れましたが、お目に触れませんでしたか。今、創元社の「続星と伝説」にかかつてゐます。
時たま都心へ出ると轢き殺されない方が不思議なほどです。用さえ無ければ静かな山村へ引き込み度いと思ひます。 不一

★ 昭和 29 年 1 月 1 日

賀春 野尻抱影
二十九年元旦 東京都世田谷区深沢町四ノ六五
「天界」へのゝ西美濃の星ゝを送りました。いすれお目にかけます。
今、除夜の鐘が終わりました。

即興 妙心寺 挿き納めけり 除夜の鐘
|——→をり除夜の黄鐘を

★ 昭和 29 年 1 月 9 日

馬と〇と人の版画、色も見事に拝見。かういふのでは志賀さんが興福寺から(贈)られた室町時代の絵馬があり、献納した(僧)名が後の足利義明の判って、歴史家をも(驚)かした事を思ひだしました。
サキジゾウ、アトジゾウはひどく面白く、「アト」が何か【或はヒヤデス?】 つきとめられたく、素晴らしいと思ひます。
「御(結)馬姿」は明治の〇〇? 「火(星)」大晦日にこたつで賀状を書いてゐるところへ闖入されたもので、いつもながら誤記があります。写真は大笑ひ、小さい孫どもも言ひあてられなかった位です。毎日小春のやうでごろごろしてゐます。

★ 昭和 29 年 3 月 25 日

(伊)(東)より思はざるお贈物ありがたく拝受。「星」に因んだものも面白く、今はあの小さい竹筒を糸につなぎ、孫のカウボーイがいばって(歩)いてゐます。遅延ながらお礼まで。

東京までの〇〇よりよかったのに惜しいことでした。大仏の「芽木の影」は珍しい発見であり、好い句だと思ひました。花の散りかける句は誰でも作るが、胸(乳)の「〇」が女性的でせう。広胸という感じの方がよささうです。「〇ヴァの虎杖」も(犬)作。やはり〇を働かせた写生はこんな句を生ませる。(稲)村岬の水族館を見ました。(海)(際)だけに魚が実にフレッシュで美しく、何時までも見てゐたくなるほどです。春潮も(熟)してさすが洋々としてゐます。

★ 昭和 29 年 5 月 9 日

狗賓星はひどく(愉)快です。赤つつらだから多分アンターレスでないかと思ひ、(秋)あるべき事を祈つてゐます。イツツボシはカシオペアをいふ地方もあり。その(美)(尚)(御)(確)め願ひます。ゴカクボシも馭者がどうか。まだ突き留めるところまで行つてゐません。何分(作)者が星を知つてゐないので、こっちの判断によほど注意が要ります。黄道光はわり、大熊の頭のゴカクがどうもひったりしませんでせう。アラビヤで「狼の尾」と言っているのなどは、実感がありすぎて恐ろしいやうです。大氣の透徹も思はれる名です。

★ 昭和 29 年 5 月 17 日

病人があつたので、どこへも御無沙汰。あの発表は大分反響がありました。いつかも言いたやうに、そこの山地の方言を蒐集してごらん下さい。岐阜方言集いやうなものがありますか。中央公論社から、その中に新版「星恋」が出ます。誓子君は新句【あの後の】を加へる由。それと「星三百六十五夜」を頼んで来たので取りかかります。なにしろ一頁一随草か、散文詩付なので楽しくも又苦し。野間仁根君のカットを挿んで、豪華本にするつもり。それでは映画はどこへ行つて見ますか。やはり見た方がいい。名古屋に天平飛鳥の美術展があつた由。見ましたか。

★ 昭和 29 年 7 月 14 日

「(滴)る桑」の句が好きでした。立ち葵の花など〇す(ほ)(ど)(朝)まで間があるが、今朝クロアゲハが二疋来ていたので、やっと(梅)(鳥)が上がるのでせう。どうもクサッテしまひ仕事も出来ず、ビールと映画でくらしてゐます。近く中央公論社から「星恋」出版。つづいて「星三百六十五夜」にかかるのだが、何でもいから、そちらの星の描写があつたら、よこして下さい。(環)(境)が出てゐるほど〇〇です。ハガキでも結構、秋へかけて〇〇でいいのです。「子守り星」は珍しいが、どなん謂れがあるのでせうか。

★ 昭和 29 年 8 月 11 日

随想ありがたく、句・文(共)にローカル味濃く、取り入れさせて戴きます。山国にゐた時代の日記を失してしまひ、近刊「星恋」に入れたのはその(残)欠で、皆大正初年のものばかり、東京では(倒)(立)ちしても何も生まれません。今頃〇〇と養老の菊水の下を流れる清流や、宿坊茶屋の噴井に冷やしてあつた豆腐を思ひ出します。オパール色の雲を透く月。火星は役 40°。風呂浴びた後のビールでほつとしてゐるところ。昼の東京はやり切れません。蛭はゐるでせうね。ここでは絶えました。御礼のみ。

★ 昭和 29 年 8 月 24 日

「狗賓さん」はどうもアンターレスのやうです。珍し名だし〇いて下さったものと組み合わせたいので、その話やその老人の環境、印象をも少し詳しく御報下さい。平家の落人部落にも何か伝承はありませんか。揖斐川下りの老船頭の話なども、もっとノートを取るといいと思ひます。こんな生活をしてゐたい。空の観察だけでは(随)(学)にならず、やめて地方味をつけたいと思つてゐます。まだ三ヶ月分しか(書)けてゐません。ともかく〇〇で、今朝は未明にオリオンを見、朝話の聞くのが早いのに感心しました。

★ 記載年不明並び未判読事例(消印年・昭和 28 年 5 月記載と推定)

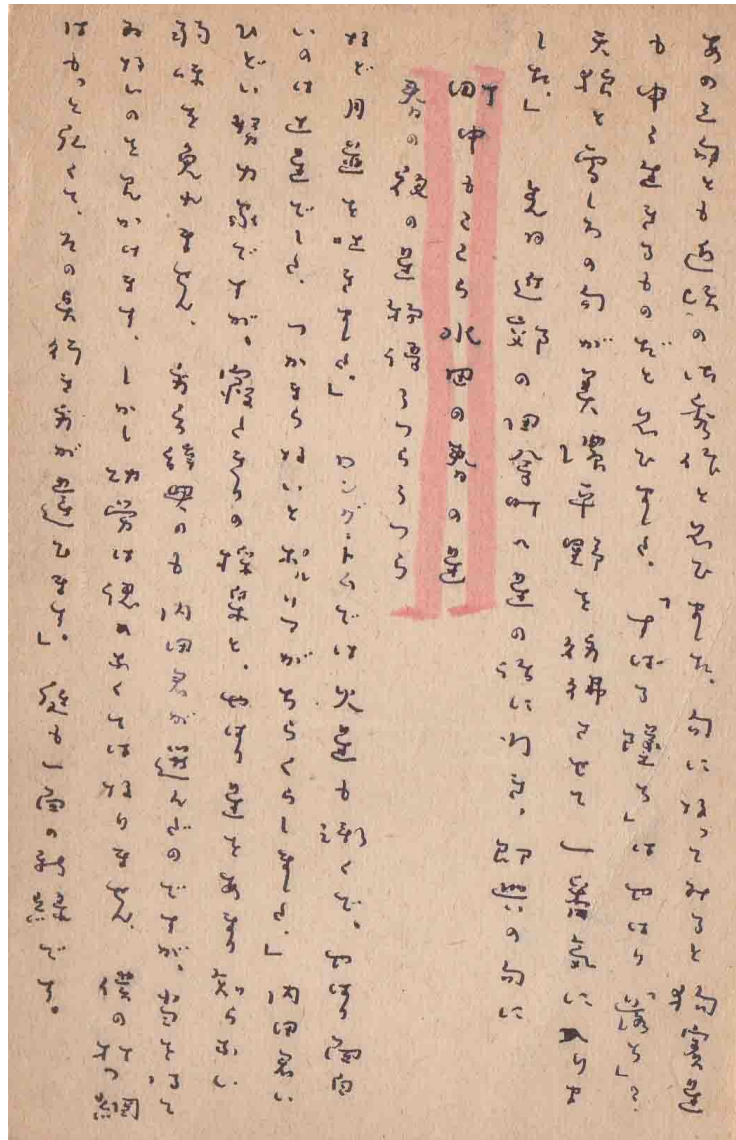


写真 6 二つの俳句と愛機ロングトム望遠鏡の記述

上記の写真 6 のハガキは、野尻自筆葉書の中で、その判読から洩れた唯一の事例である。この際、この共同作業者二名に加わっていただき、その経路を辿りつつ、また内容の面白さとその苦労を味わっていただければ幸いである。野尻氏の作句の妙味とか、またより面白いと思われる愛機望遠鏡・ロングトム号を使つての天体観望の様子など、目にも浮かぶような光景であろう。この望遠鏡は、横浜市の大仏次郎記念館に所蔵されており、時に触れた野尻資料の展示会などでは、実地にご覧になった方も多いのではと思われる。可能であれば、記念館のご好意により、この望遠鏡の見え味を味わいたいとも思う次第である。これらの内容をヒントに、ぜひ読者皆様も、この葉書の判読理解に挑戦をしていただきたいと望む次第である。

以上は、小島・浅木両名による野尻自筆葉書の判読の結果である。その途上の浅木の悲鳴「・・・読み込みに難渋しています」という言葉は、本音である。またそれ以上に重要な内容の写真 2 は、トイカケホシ感想の葉書であり、大変に深い興味を喚起する。

その他、この葉書の中には、「ヘイケホシ」と「ゲンジホシ」の採取に対する根源的な疑問もある。昭和 25 年 3 月 1 日書中でのゲンジ・ヘイケの名は、山本博士が初めて命名したのではとの野尻氏見解である。根拠も無いままに、元々は野尻氏グループの発見を山

本博士が著書に採用したと来てきたのが、完全に誤見解であると言う証左であり、源平合戦で破れ去った平氏は、ベテルギウスの新星爆発までには決着をと望んでいるかもしれない。その他の葉書にも、「ビールと映画ですごしています」というような、結構微笑ましいエピソードがしたためられていたり、読み方によっては大変に貴重で、当時を知る唯一の手かがりとなることは間違いない。因みにこうした野尻氏と師弟関係のあった方たちとの交わりを、是非とも映画化などしてほしいと願うものである。因みに、人気女優の中川翔子氏は、野尻の代を下る遠縁ともいい、これは悦ばしい限りである。

8 天文岐阜誌での研究紹介 香田寿男（ 壽男 ）

岐阜金華山天文台での簡易出版物はあるが、台報として、「天文岐阜」があった。以下に紹介するものは昭和 26 年もしくは 27 年あたりの天文台会員諸氏への印刷配布物であるが、その中に香田寿男氏による星和名蒐集の中間報告的な発表記事が二ページに亘り掲載されている。「揖斐郡伝承の星名」と題された短文であるが、要領よく纏められ、代表的でよく知られた星々と、西洋星座名に対比させた日本の星の名は、それだけでも面白い。また、野尻が標榜したと思われる星和名民俗学的な評価等も記されて、農耕民族と星や暦そして暮しの相関関係など、未発掘の研究対象として、新たな発展を期するのも意義深い。多分、論文的発表としては、野尻氏に和名蒐集報告を継続しつつも、一区切りの意味をもたせての執筆とされた印象である。上記の野尻葉書の中に、「天文岐阜はまだ入手していません・・・」との記述があるが、この香田執筆の記事の事かと思われる。この他にも 昭和 40 年前後と思しき星の和名紹介「奥揖斐の星」と題する新聞記事等もあったようだが、それらの詳細はこれ以上明確ではない。野尻氏の協力者としての功績確認のため、今後のより詳しい発掘の必要性を痛感する。また、岐阜県教職員ということで、教育委員会などで活動経歴などにもあたり、ご家族を尋ねて資料類の存在を確認することも意義深いものと思われる。

以下の記事写真は印刷ページが連続ではないが、紙数の制限による編集事情で、同じ出版号内の印刷である。現代ならば、学会発表にも耐える得る程の内容ではないかと思われるくらいである。せっかくなので、その冒頭感想部分を以下に紹介したい。エッセイともいえるものであるが、教員らしい趣味人、香田寿男の人となりを感じて頂きたい。

「揖斐郡伝承の星」

会員 香田壽男

しかしながら砂を噛むような単調さに飽みつつも、なお西濃の一角に獅噛みついている自分です。でも、倦怠と焦燥の底にも楽しさがあります。・・・すなわち、地にはこどもが、天には星が、つぶらな瞳を輝かせてつきまとして来てくれるのです。

不幸にして私が星の瞳を知ったのはたった数年前でした。

「ま砂なす数ある星のその中に 我れに向いて光る星あり」

夢多い少年の日に「我れに向いて」輝く星を知らなかったことは全く不幸でした。せめて、新しい世代の今の子供たちには、この「我れに向いて光る星」を与えてやりたいものです。・・・傍々、前から退屈しのぎに続けていた、方言や伝承調べが出尽くしたので、専ら星の方言へと研究が進みました。昭和二十四年から揖斐郡大和、奥蔵、北方三ヶ村を足場に、簡単なペーパー宿題を主にして調査した幾ダースかの収穫のうち、確実なもの、あまり平凡でないものを選んで次表のようにまとめて見ました。この蒐集について深く感じるのは、いま、この農山村に幾百千年の昔から、語り継ぎ、言い継がれて来たこの宝のような美しい石碑伝承が、今や急速度で滅び行かんとしていることであります。どこの家でもこう言います。「——さあ、死んだおばあさんがよう言わしゃつたが。」・・・星を農耕の暦として百年一日のように営んで来た自給農形態の崩壊にあたって貴重文化財は激しく朽ちてゆきつつあるのです。我らの祖先がどんなに親愛敬虔の眼で同じ星を仰いだか。その感覚を再生できぬものか。けちな迂遠な骨折りと笑わないで下さい。この地上に私というものが生まれなかったら、・・・(中略)・・・

わがメッカ岐阜天文台へ、「郷土の星」を持ち寄ろうではありませんか！！

揖斐郡伝承の星名

会 員 香 田 寿 男

しかない教員募集。砂を噛むような単調さに飽みつ
つも、なお西濃の一角に彫りこみついている自分です。
でも、他意と焦燥の底にも素しさがあります。…すな
わち、地にはこどもが、天には星が、つぶらな瞳を輝
かせてつきまといて来てくれるのです。
不幸にして我が星の輝きを知ったのはたつた数年前で
した。

「まげなす散ある星のその中に
我れに向いて光る星あり」

夢多い少年の日に、「我れに向いて」輝く星を知ら
なかつたことは全く不幸でした。せめて、新しい世代
の今の子供達には、この「我れに向いて光る星」を予
えてやりたいものです。…やがて、前から退屈しのぎに
経てきた、方言や伝承しらが出展したので、専ら
星の方言へと探検が進みました。

昭和二十四年から揖斐郡大和、横蔵、北方三ヶ村を
足場に、簡単なペーパー宿題を主にして調査した幾
つかの収穫のうち、確実なもの、あおろみ平凡でない

ものを選んで氷張のようにまとめて見ました。

この蒐集について深く感じるのは、いま、この揖山
村に幾千年の昔から、語り継ぎ、言い継がれて来た
この宝のような美しい行脚伝承が、今や急激な減
行かんとしていることでもあります。どこかの家でもこ
う言います。

「—さあ、死んだお婆さんがよう言わしやつた
が、…星を農耕の暦として百年一日のように替
り、自給自足の形にあらたてて置置の文化財は激
く朽ちてゆきつたものです。我らの祖先がどんなに
細やかな心で同じ星を仰いだか、その感嘆を再生
できぬものか。

けちな迂な骨折りと笑わないで下さい。この地上
に私というものが生れなかつたら、可憐、幾つかの
星の美しい星名が、忘れ去られて埋もれてしま
うのだたかもしれません。

星を知り、星に輝かせる会員の皆さん、手を繋ごう。
わがメタカ岐阜天文台へ、「郷土の星」を持ち寄ろう
ではありませんか！

星	方 言	参 考 事 項
プレアデス (牡牛)	おすわりさん	昂(すばる)の訛り。広島地方にはすわりじぞうの名がある。
	すわりぼし	全 上
	ほきぼつさん	ほうき(方言ホキ)の形に見たてたものであると思われる。星の意 かも知れない。
	はごいたぼし	これは全国に珍しくない星名でももちろん形から云つたものと思う。
	すきぼし	秋のぼりそめる頃の形を風になびくススキの穂に見たという。 佳い名と思う。
	むつぼし	むつらぼし(六連星)は国語辞典にもある。数を正確に数えている。
	ひちよのぼし	七曜星一という、もう大分文化の影響が伺う。七曜の星をさまざ まに配てゆく。
	ひちほのぼし	全 上
(オリオン座)	ひちやのぼし	全 上
	ろくじぞうさん	きわめて特異な名称と思われる。六星のその数から言う歌謡である か。
	さむらいぼし	オリオンの日本訳かと思つたが長野県にも同名があり、何か伝説があ つたが埋れてしまつたものか。
(オリオン座)	みつぼつさん	全国的な愛称である。
	まんわさん	きからすきぼしと同じ理由であろう。字を充てれば「両敵」か。
	まんわぼし	全 上 時に「まんがまし」と訛る。
デルタ エプシロン ゼータ	さんじようのぼし	群玉、瑤玉に同名がある由。三星のほしと疊語で呼んだものか。
	ししの頭部	よく大鎌といわれている部分である。雨降をかける金具ににている からか。全国にない逸集の由。
(いるか座)	ひしぼし	珍しい名ではないが、鋭い針とな、山村人の眼かなと敬服したい。
(大ぐま座) の 北斗七星	ひしがたぼし	全 上
	ななつぼし	古い呼称である。全国で言われている。
	ひちよのぼし	七曜の星。スバルにも同名がある。
	ななたいのぼし	七次星が原称であるという。

(以下4頁へ続く)

写真7 天文岐阜誌 P.7 掲載の「香田寿男・揖斐郡伝承の星名」

プレアデス(牡牛)

「おすわりさん」	「すわりぼし」	「ほきぼつさん」	「はごいたぼし」
「すすきぼし」	「むつぼし」	「ひちよのぼし」	「ひちほのぼし」
「ひちやのぼし」	「ろくじぞうさん」		
オリオン座	「さむらいぼし」		
オリオン座 デルタ	エプシロン	ゼータ	
「みつぼつさん」	「まんわさん」	「まんわぼし」	「さんじようのぼし」
ししの頭部	「といかけぼし」		
いるか座	「ひしぼし」	「ひしがたぼし」	
大熊座の北斗七星	「ななつぼし」	「ひちよのぼし」	「ななたいのぼし」

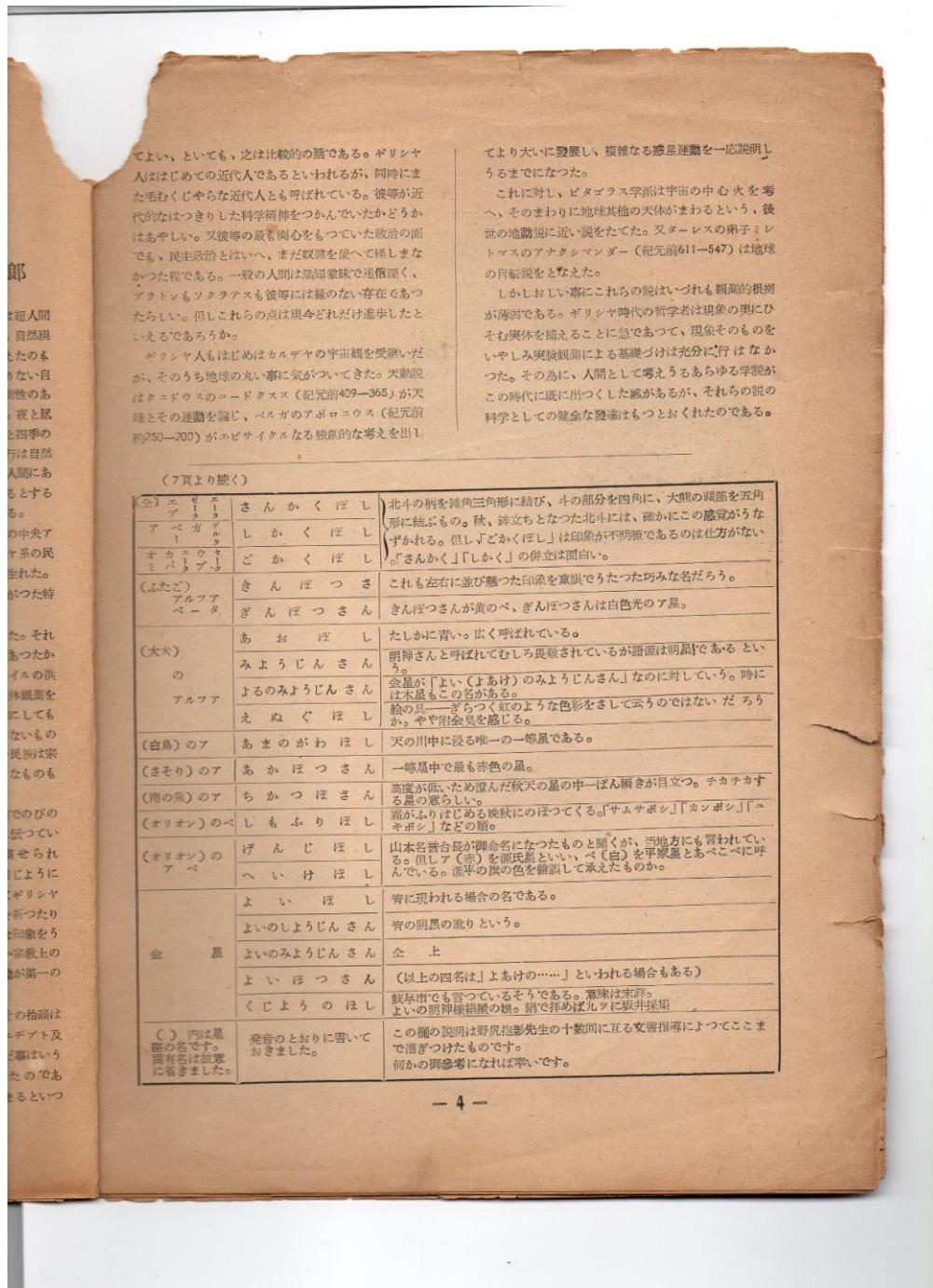


写真8 天文岐阜誌 P.4 掲載の「香田寿男・揖斐郡伝承の星名」

大熊座の北斗七星	「さんかくぼし」	「しかくぼし」	「ゴカクボシ」
ふたご(アルファ・ベータ)		「きんぼつさ」	「ぎんぼつさん」
大犬 (アルファ)	「あおぼし」	「みようじんさん」	「よるのみよじんさん」
	「えぬぐぼし」		
白鳥のアルファ	「あまのがわほし」		
さそりのアルファ	「あかぼつさん」		
南の魚のアルファ	「ちかつぼさん」		
オリオン座のベータ	「しもふりぼし」		
オリオンのアルファ・ベーター		「げんじボシ」	「へいけぼし」
金星	「よいぼし」「よいのしようじんさん」「よいのみようじょうさん」		
	「よいぼつさん」「くじょうのほし」		

9 特に「源氏星・平家星」についての見解

山本一清博士著作の「星座の親しみ」は、現代ですら多方面からの注目が続いている。その中で「平家星」「源氏星」の紹介がある。即ち平家の赤旗と源氏の白旗になぞらえて、オリオン座のベテルギウス(赤め色)は平家星、そしてリゲル(白め色)は源氏星であると示されている。さて、ここで面白い事が判明して来た。この赤と白の星の和名は、果たして誰の採取なのか全く分らなくなっているらしいという事である。これは、この報告文に掲載した野尻葉書・昭和 25 年 3 月 1 日を、小島と浅木の共同作業によって浮かび上らせたものである。上記の判読紹介結果によると、この二つの一等星の命名経緯について、野尻氏自身が香田氏に対して、「・・・ゲンジとヘイケは山本博士が名をつけたのが最初と信じますが・・・」という感想と意見が書かれてある。

これは大変に面白い事で、香田も岐阜県での採取をし、それを野尻に報告したものと思われる。香田の野尻あての報告書簡等が発見されればその裏打ちとなって、その経緯が辿れるはずである。そこから考えられるのは、果たして山本博士は独自にこの二つの星に対して「平家星・源氏星」とオリジナリティにそう呼ぶように成られたのか、またはやはり天文アマチュア一よりの報告であったのか、または民俗学的な伝承があり著書にしたためられたのか、そのあたりの事情は全く理解に及ばない。特に名著「星座の親しみ」の大正から昭和にかけての初期版には紹介は無く、後年の改定追記再販には記述されているという事ら推論すれば、何か事情がある筈である。何時ごろから「星座の親しみ」に紹介が始まったのか、全期間中に発行された同書を、時系列的に並べることも必要であるが、果たして全ての版が残されているかは判然としない。少し閲覧したが、さすがに京都大学山本資料類にも全巻は残されていないようである。また、香田寿男によるこの二つの和名については、大変に不可思議なことが伝えられている。昭和 25 年初頭前後の報告と思われるが、香田は赤いベテルギウスを「ゲンジボシ」、青白いリゲルを「ヘイケボシ」として正反対名を報告したのである。これには今もってその経緯は不明確であるが、当時、美濃西部の古老が図まで示したというからには、それなりの事情もあるようであり、単なる伝承誤りとも言えようか。結局これを受けて、果たしてこの二つの一等星の星和発見者は一体誰なのかを含めて、全貌の明確化は無理なのではとも思えるほどである。



写真 9 オリオン座 平家星 (左上・ベテルギウス)
源氏星 (右下・リゲル) 福島英雄 撮影

10 民俗学的見地における星の和名の扱いについて

ここで、星の和名と民俗学についての関係を論じておくべきかと思われる。野尻抱影の著作の多くには、当然ながら「星の民俗学」という表題とともにそれらの出版物の題名が記されている。これは出版社の販売戦略ともいえるであろうが、実際、野尻自身の著述そのものの中にも、民俗学という単語も用いられている。素人目には、星の和名も当然に民俗学的な扱いと、その価値観の定着が相当に図られている物と思い込んでいた。昨今の天文・星ブーム、特に天文学者OB諸氏のアプローチにも、世界的な星の伝承蒐集その他にも多く扱われ、その範疇の一端を占めている。それらは野尻著作の影響下での、天文関係者として立身された方々も多く、大変に慶ばしい限りである。

さて、そのような印象の下、どうしても、日本民俗学の祖・柳田国男(1875-1962)について言及すべきであろうと考えた。柳田は大変に著名なる民俗学者で、本邦のこの分野の開拓者との尊敬を受け続けている。坂井も一度、柳田氏の足跡を尋ねて、遠野市の柳田関係の博物館を見学した。柳田はもともと農政官僚として活躍し、その職責の途上立ち寄る地での伝承等に感心を抱き、馬と娘の悲恋物語「おしらさま」等の紹介を始め、その業績は枚挙に暇が無い。そして当時の文化人・折口信夫(おりぐち しのだ) 即ち歌人の釈迢空(1887-1953)とともに1935年「民間伝承の会」を設立、1949年には「日本民俗学会」へ発展継承を遂げた。この時期の民俗学は、在野素人の学会とも言われたそうであるが、農山村の伝承、生活、迷信の解明であれば、これは理想的形態とも言え、海外との比較においては、「ケンブリッジ学派」の影響下にあったとも言われる。また、根本的設立の趣意は、民俗学とは過去の文献類の調査のみに留まらず、民族の特徴と評価は、文献学の及ばぬ限界点を探る手法と定義づけた。主として「フィールドワーク」、即ち現地聞き取り調査および資料収集をその方法とし、「重出立証法」(別名・比較研究法)として科学的な体系を確立した。調査研究の対象は、生活、習慣、説話、歌謡、諺、信仰など多岐に及び、目に映ずる資料を「体碑」、耳に聞こえる資料を「口碑」そして心意感覚に訴える資料を「心碑」と位置付け、それぞれの研究手法とした。

さて翻って、上記に従えば、野尻抱影の星の和名蒐集研究は、まさしく上記の民俗学の範疇であろうと、一応の判断はされる。天文学の世界では、明確にその定位置は難しいのであろうが、これほどの世情への影響を及ぼしてきた人物と業績はゆるぎなく、昨今、その評価が再認識されてきた事は、時宜を得た結果でもあろう。また、野尻の業績は、ほぼそれらの蒐集活動も波及し終え、逝去と共に終焉化したというのも、多分正しいことであろう。

では、果たして、「星の和名蒐集」とその関連は、純粹に「民俗学」と評価されてきたのであろうか・・・という疑問に再び行き当たった。何か、この分野のみが、一人孤立的に「星の民俗学」と叫んでいるような印象に陥ったのである。まず、「日本民俗学会」と「日本文化人類学会」へ非公式的に私的質問として、電子メール媒体を使い「野尻抱影」と「星の和名研究業績」の両学会の扱いについて質問を出してみた。結果は、日本民俗学会は「会員以外の一般市井」からの質問には答えないのが方針と回答を受け、文化人類学会からは返事一つ頂けなかった。これらの反応は、如何に黙考すべきだろうかと、今も不思議でならない。

星の和名と野尻抱影は、まさしく民俗学的手法と、その研究姿勢の口碑、体碑、また心碑までもを網羅している立派な研究と言い得よう。しかし、民俗学的学会では余り価値も認められず、また天文の学会でも、必要以上には未だ扱われてはいないと言えそうでもあり、この民俗遺産の扱いについては、甚だ心痛を感じる次第である。星の和名など、学問業績には至り難く、放置もしくは無視のままというのが現状なのであろうか。心さびしい限りである。

いつも感ずるのであるが、大正ロマンとか昭和ロマンまで含めると、文学という学問分野では、著名作家たちは大きい評価を受ける。しかし、山本一清博士は言うに及ばず、野尻抱影までも含めて、そのよき時代の「文学史」(そして民俗学にも)研究にも、含まれるべきであろうと感ずる。宇宙・衛星軌道から俳句・短歌も詠まれる事もありうる科学時代、畢竟そこには宇宙文学、そして新たなる星の民俗学も出現させ、心豊かな時代を形成すべきであろうと感ずる。

大仏次郎と野尻抱影兄弟の横浜市記念館は、その一翼を担ってほしいと望む次第である。

11 結語

以上が野尻書簡葉書の判読と、その推論及び解釈の試みである。野尻による星和名蒐集と著作は、40 歳代後以降における業績である。今回では言及は無理ではあったが、特に仏教系の美術解説とか、欧州思想家等の論評その他も、明確にされるべきである。

また、いずれ全ての野尻星和名自筆葉書類を CD-ROM などの手段を用いて、ご希望の方様に配布も試みたいと思う。パーシバル・ローウェルの著作を読み、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)が来日し、そしてその弟子の野尻抱影は文学的星研究に従事し、またプルートーを冥王星と命名した。更に香田を始めとし、日本全国に星和名のアマチュア研究者を数多く誕生させた。現代社会は、専門的師弟関係は多いが、こうした楽しい大河の流れは、もう見られないと危惧を感じる。文化とは、そして星に集うとは、こういう価値観なのではないだろうか。それは先人への遺徳であり畏敬であり、文明そのものへの尊敬と自信でもあろう。

また、報告者の一人坂井とその他の関係者三名は、今回の研究会報告の後、横浜市の「大仏次郎記念館」へ訪問の機会も得た。同館に寄付保管された、肉眼星の会を通じて寄せられたと思しき和名蒐集家よりの多量の書簡類(大半はノートに貼り付けられている)と、今回の香田寿男自筆の野尻あて報告葉書 7 通(いかにも少なく、ウィキペディアには、平家星・源氏星について四桁に及ぶ葉書報告という説明は余りに象徴的か)も閲覧した。先ずは同館との意見交換に終始したが、今後の展開に重きを置き、共感理解を頂く各位様と共に、顕彰会とか研究会の開始も提言したい。果たして冥王星の命名者と知る方は多いとは言え、野尻抱影の存在意義と価値を、今後より明確にするべきと思量したいと思う。

最後に 1955 年の野尻氏 70 歳誕生日の集いに参加したような感覚にとらわれつつ、参加者のお一人お一人への邂逅とともに、この写真を皆様にもお楽しみ頂けたら幸いである。



写真 10 野尻抱影 70 歳誕生祝い 1955 年 11 月 20 日 東京プリンスホテル
(前列右二番目・山本一清、同三番目・野尻抱影、前列左三番目・広瀬秀雄)

12 参考文献

- ・ シリーズ民間日本学者 21 野尻抱影(星の文化伝) 石田五郎著 1989 年 9 月 5 日 リポート
- ・ 京都大学第 3 回アーカイブプロジェクト 2012 年 野尻抱影・星の和名研究書簡について 坂井義人
- ・ 京都大学第 5 回アーカイブプロジェクト 2014 年 野尻抱影・星の和名研究書簡その 2
・ ・ ・ ・ ・ 坂井義人 小島茂美 浅木宏
- ・ 京都大学第 5 回アーカイブプロジェクト 2014 年 岐阜金華山天文台 ・ ・ ・ ・ ・ 坂井義雄 坂井義人

13 付録図版

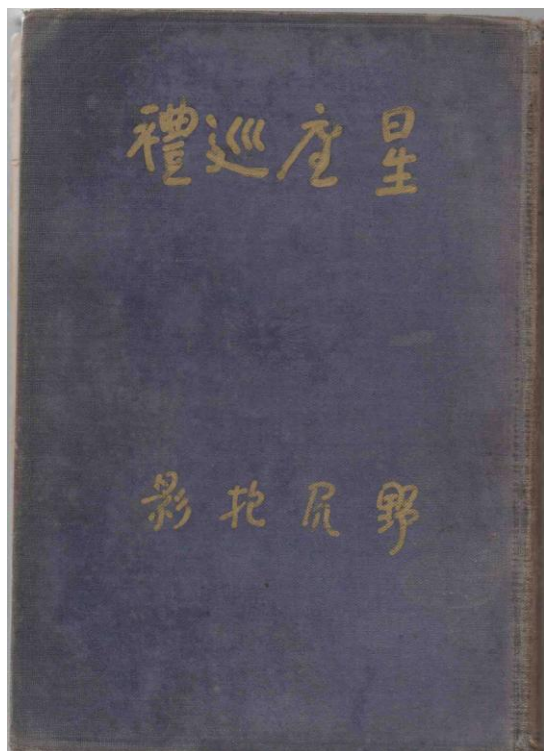


写真 11 初の天文書 大正 13 年 12 月

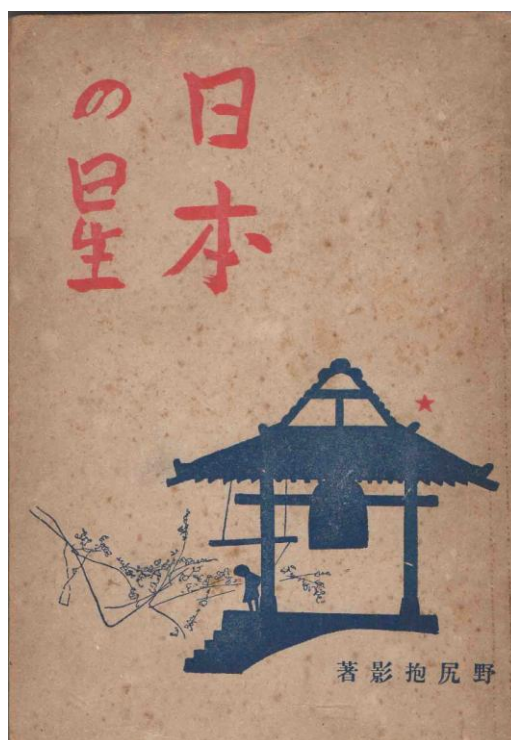


写真 12 初の星和名書 昭和 11 年 6 月

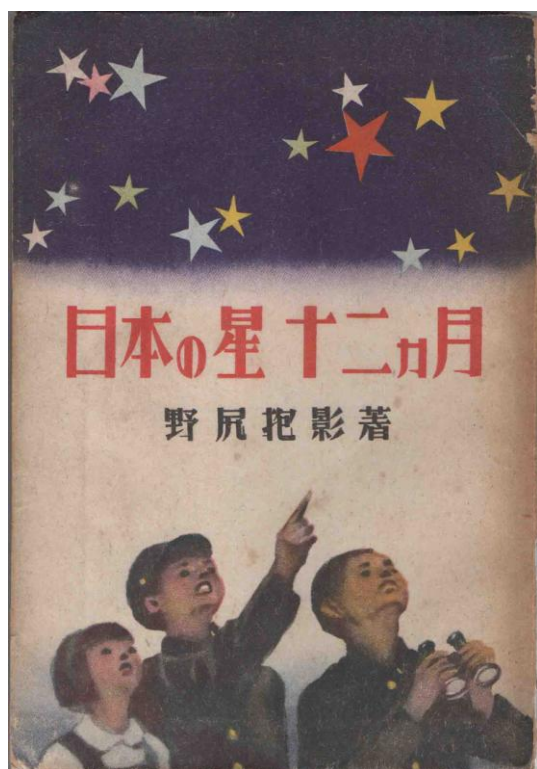


写真 13 年 年少向け 昭和 24 年 4 月
(和名紹介として初の年少対象)



写真 14 写真 13 の記述内容
(平家星・源氏星の紹介)